二松學舍大学人文学会第九十九回大会研究発表要旨

日時　平成二十一年八月一日（土）
場所　二松學舍大学九段校舎二〇一教室

研究発表

李二曲の『四書反身録』について

博士後期課程三年　久米晋平

李二曲（一六二七―一七〇五）の『四書反身録』（以下、『反身録』）は、康熙二十四年（一六八五）、二曲五十九歳の時に刊行された。そもそも『四書』に対する姿勢として、李二曲は読者に「諸（これ）を身に体し、諸を行に見（しめ）し、之を充たして天徳為り、之に達して王道為り、体有り用有り、世に補ひ有る」ことを求める（「識言」）。さらに「四書数章を看るには須らく白文を看るべし。先に註を看る勿れ。白文契せざれば、然る後に註及び四書大全を閲す。」（「関中書院会約」）という発言も併せて考える時、『四書』そのものを主体的に咀嚼し、「反身実践」するというのが、李二曲の基本的な態度と言える。

ところで、李二曲の存命時、『反身録』に対しては『四書集注』を羽翼するという評価（「潜確録」）があった。字義的な観点も含め、『四書集注』はどのように『反身録』に反映されているのか。

本発表では、『反身録』述作の意図を探ることによって、李二曲の『四書』観を明らかにしたい。さらに可能であれば、『反身録』への批判があったことを踏まえ、主に朱子学を宗とする同時代の人士との対比にも言及したい。

魯迅小説に描かれた「女性像」
――『吶喊』、『彷徨』を中心に

博士後期課程三年　李選

本研究の目的は、魯迅の小説に女性はどのように描かれたのか、魯迅は彼女たちを通してどんな社会問題を取り上げたのか、中国前近代の封建性をどう暴きだしたのかについて考察すること。そして魯迅の小説集『吶喊』、『彷徨』の中のもっとも完成度の高い五つのタイプの女性像、つまり儒教倫理を背負った女性、家出した後の「娜拉（ノラ）」、自己意識を持ち始めた女性像、息子を失った母親像、脇役の女性像を取り上げて分析する。

魯迅が女性を描くのはうまくないという見解が魯迅研究者の中にある。だが少ない描写でその時代女性がどんなに社会から苛（さいな）まれてきたのか、彼女たちはどのような方法で反抗したのか、

その時代の女性問題などについて、魯迅の女性像は見事にこれらを明らかにしたのであった。魯迅は中国の誰よりも「近代」というものに目覚めて、そして近代の「女性解放」問題に関わるいくつかのテーマを意識しながら、その側面を小説に登場した人物に投影させた。中国の前近代の封建性からより酷い被害を受けたのは女性であった。したがって女性たちの真実を追うことは当時の中国社会の非人道的な面、残酷な実態を暴く作業とも言える。

付記　第九十九回大会は、当初七月四日（土）に柏校舎で予定されていましたが、本学学生に新型インフルエンザへの感染が確認されたため、延期され、前記の日程となりました。また、予定されていた講演、懇親会は中止となり、研究発表、総会のみの開催となりました。

（人文学会事務局）